

〔地域貢献活動におけるオリジナリティ〕

岐阜県立看護大学が取り組む 「卒業生支援・キャリア形成支援事業」の実績と成果

田辺 満子¹⁾³⁾ 小森 春佳¹⁾ 茂本 咲子¹⁾ 橋本 麻由里²⁾³⁾ 黒江 ゆり子¹⁾

Achievement and Effects of Career Development Support for Graduates of Gifu College of Nursing

Michiko Tanabe¹⁾³⁾, Haruka Komori¹⁾, Sakiko Shigemoto¹⁾, Mayuri Hashimoto²⁾³⁾ and Yuriko Kuroe¹⁾

要旨

本学の卒業生支援・キャリア形成支援におけるオリジナリティは、第一に、4年間の体系的な就職進路ガイダンスにより、専門職としての自分の将来の在り方を考える機会を在学時から各学年に合わせて配していることである。第二に、卒業生と在学学生が意見交流できる機会が多様に設けられていることであり、在学学生は専門職者として活動している先輩の体験談を直接的に聞くことで、卒業後の自己の成長をイメージする機会となっている。同時に、卒業生にとっては、卒業後の自己の実践活動を振り返り語ることで、今後の活動のあり方を考える機会となっている。第三に、卒業後の新任期に母校に集まり同級生・同窓生と意見交流する機会が設けられていることである。たとえば、新卒者交流会では、就業後3か月程が経過した頃に集まり、仕事への対応がまだ十分にできない自分について悩んでいるのは自分ひとりではないことに気づき、明日への活力を得ており、卒業2年目卒業生交流会では、就業後1年が経過し、自身が新人を迎える時期に今後のあり方を考える機会となっている。さらに第四として、大学教員が県内医療機関を訪問し、看護管理者・卒業生・大学院修了者と話し合うことを通して、現場と大学が協働して人材育成の在り方を考える機会に繋がっていることである。すなわち、在学期から卒業後までの継続的な支援、および大学と現場との繋がりをもった支援を体系的に推進していると言える。と考える。

I. はじめに

看護専門職として、生涯学習を継続していくことは個人の問題にとどまらない社会的な責任を伴うものと考えられる。看護職者の多くは組織に所属し就業する中で、個人の自立・自律した職業意識を基礎として、個人の能力開発を個人と組織がパートナー意識のもとに計画的にキャリアマネジメントしていくことが重要になる。

本学は岐阜県立看護大学として平成12年度開学以来、本学の地域貢献活動として、県内の看護の質の向上を目指し、看護研究センター事業の中で、現場看護職の生涯学習支援としての「共同研究事業」、及び岐阜県という広範な地域を視野に入れた研修活動を主とした「看護実践研究指

導事業」等に取り組んできた。さらに、平成15年度に第1期卒業生を送り出してからは、生涯学習支援の一環として卒業生を対象にした卒業生支援事業・キャリア支援事業に取り組んでいる。卒業生の職場定着、就業促進を目的に卒業生間の交流事業として、平成19年度から卒業後2～3か月の新卒生を対象とした「新卒者交流会」、翌20年度からは卒業2年目卒業生を対象とした「卒業2年目卒業生交流会」を開催し、職場定着に向けた就業支援を実施してきた。

加えて、平成21年度からは、本学が取り組む共同研究や研究支援、及び大学院博士前期課程への就学等の生涯学習支援に対する認識を高めるとともに、その活用を全

1) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 就職進路対策委員会 Career Support Committee

学体制のもと取り組んできた。また、平成23年度からは学部同窓会と共催し、日々の看護業務の中で出会う看護の課題や看護業務の改善、さらに仕事への思いなどについて卒業年度を超えて意見交換し、教員も参加して一緒に看護の課題や未来について語り合い、卒業者の振り返りに役立ててもらふことを目的に「看護実践を語る会」「卒業生交流会」として開催、さらに、平成28年度からは「卒業生のキャリアアップ支援のための研修会」の趣旨を加味し平成30年度まで開催してきた。

そこで、開学20周年となる今年度、これら継続的に取り組んできた卒業生支援・キャリア形成支援事業を振り返り、成果を確認するとともにその意義と今後の課題について検討したいと考える。

II. 本学が取り組む卒業生支援・キャリア形成支援事業の特性

1. 主体的なキャリアマネジメント能力を育成するための基盤づくり

1) 在学時における基本的考え方についての基盤づくり

本学はアドミッションポリシーに、“自ら考え積極的に問題解決行動をとることができる人、岐阜県の保健・医療・福祉の充実に深い関心が持てる人等の入学を求める”と示し、自らをマネジメントしていく力の育成を強化している。授業科目では、「機能看護方法」において看護専門職としてのキャリアマネジメントの意義と方法について教授し、グループワークでは他者の考え方を共有し自己の考え方を整理・発展させる機会としている。シラバスには、当該科目の目標として“看護専門職としての責任と倫理を踏まえ、看護の専門性を発展させていく重要性和自己研鑽することの意義、組織人として継続的な教育支援を受けながら生涯設計を視野に置いてキャリアマネジメントしていく方法等について考える。”と示し、主体的なキャリアマネジメントの基本的な考え方が身につくように授業展開している。

2) 就職進路対策委員会が取り組むキャリア形成支援事業

(1) 1年次からの体系的な就職進路ガイダンス

本学は、卒業時には全学生が保健師・看護師国家試験受験資格を取得できるよう、さらに選択にて各6名の学生が助産師国家試験受験資格あるいは養護教諭一種免許を取得できるよう教育課程を編成している。このことから、在学時から主体的なキャリア形成を推進するための支援とし

て、就職進路対策委員会が主体となり、看護専門職として就業することは、社会人として職業人として仕事に責任を負うことを意味し、その職業を通して自らを高めるという意味を持つということを1年次から問いかけ、4年間を通じて自己の適性に応じた就職進路選択ができるように体系的・計画的な就職進路支援ガイダンスを実施している。

(2) 県内医療施設等による就職ガイダンス

2・3年次においては、「県内医療施設等による就職ガイダンス」を平成23年度から毎年度1月に開催し、参加できる機会としている。この取り組みは、県内の主な実習施設で本学が取り組む共同研究事業等で協働関係にある施設の看護管理者や先輩看護師等によるそれぞれの施設に関する‘全体説明会’と‘個別相談会’で構成される。毎年度、17～20の医療施設及び県内保健師の募集機関の参加を得ており、現場の看護管理者や卒業生から就業状況等について直接的に声を聞く機会となっている。学生には主体的な参加を促し、直近5年間の在学生の平均参加状況は、全体説明会に2年次生は約57%、3年次生は約71%の参加があり、個別ブースでの個別相談には3年次生中心に毎年約40～50名の参加がある。参加学生は、様々な施設の特徴を知ることができ、職種・施設の選択にあたり自分に合った進路を考える機会となったと評価している。また、ガイダンス当日は、参加施設看護管理者と学長・学部長・研究科長等学内管理者と就職進路対策委員会代表者による懇談会を開催し、本学の生涯学習支援の取り組みを共有し、卒業生の就業状況を基に現場での育成支援のあり方について意見交換し、大学と現場が協働して人材育成を進めていくことを確認している。

(3) 卒業生と在学生との交流会

さらに、平成28年度からは、就職進路対策委員会と看護研究センターが共同して看護師・保健師・助産師・養護教諭として働く卒業生3年目から5年目の卒業生各1～2名（各年度計6～7人）をシンポジストとして招聘し、自身の体験を語ってもらい、1年次から4年次の全在生と交流する「卒業生と在生との交流会」を11月中旬に開催している。当該交流会は、「第1部：シンポジウム」と「第2部：職種別交流会」の2部構成であり、参加状況は表1に示す通りである。1年次生にとってはまさに職種選択の一助になり、2・3年次生にとっては先輩がどのような思いをもって実践しているか直接知る機会となっている。ま

表1 卒業者と在学生との交流会：シンポジウム・職種別交流会参加状況（平成30年度～28年度）

	第1部：シンポジウム参加学生数（参加率）			第2部：職種別交流会参加学生数*				
	1年次生	2年次生	3年次生	看護師	保健師	助産師	養護教諭	合計
30年度	68(85%)	57(70%)	78(83%)	31(1)	5	11(1)	9	56(2)
29年度	85(92%)	64(80%)	79(99%)	38	18(2)	20(5)	10(3)	86(10)
28年度	30(38%)	63(79%)	71(90%)	33	23	7	11	74

*第2部職種別交流会の対象は2、3年次生である。（ ）内は2年次生の人数。

た、卒業者にとっては、自身の看護実践を振り返ると同時に、在学生との交流を通じて自身のキャリアマネジメントのあり様を振り返る機会となっている。

参加した3年次生に、自由意思による無記名記述式の質問紙調査を実施した結果、各年度参加者の90%以上が交流会は有意義だったと回答し、第1部シンポジウムについての意見・感想では、看護専門職としての悩みややりがいを知ると同時に、看護職として働き続けられることの大切さを考えることができたとする等の内容が確認できた。また、第2部の卒業者との職種別交流会については、看護師、保健師、助産師、養護教諭として働く姿をイメージすることができ、今後の就職活動や学習の進め方などの具体的な悩みの解消につながっていた。

また、29年度からは2年次生にも同様の自由意思による質問紙調査を実施したところ、看護師になりたくて入学したのに学習を進めていく中で本当に看護師になりたいのか悩むことがあったり、将来の目標像までの道のりの長さを感じたりしていたが、一方で、現在の学修が卒業後の看護活動につながっていることを実感でき、もっと勉強に励まなければならないと思う等と、今後の学習への意欲につながっていた。毎年度、シンポジストにも自由意思による無記名記述式の質問紙調査をしているが、自分の看護実践を振り返り自己評価する機会となっており、自分の思いを在学生に伝えることで、今後も仕事を前向きに頑張りたい、看護職者として自分らしく成長していきたい等の思いが表出されていた。

2. 看護研究センター事業として取り組む卒業者支援事業の実際

本学は、先に示した通り、卒業者の生涯学習支援の一環として取り組む卒業者同士の情報交換・交流支援として、学内にて全学的協力体制のもと、「新卒者交流会」「卒後2年目卒業者交流会」、及び学部同窓会との共催の「卒業者

交流会・研修会」（以降3つの交流会を卒業者交流会とする）を実施してきた。その実施結果は『卒業者への支援実施報告』として小冊子にまとめ、交流会参加者並びに卒業者、在学生に配布し共有している。また、先述の「県内医療施設等による就職ガイダンス」当日の看護管理者との懇談会においても卒業者の実態として共有し、卒後の人材育成のあり方について意見交換をしている。

さらに、平成23年度からは、卒業者が就業する県内主要医療施設の内、毎年2～4施設に本学学長、学部長、研究科長、及び4つの看護学領域と看護研究センターの責任教授数名が施設を訪問し、現地の看護管理者と就業している卒業者と共に、本学が取り組む生涯学習支援、卒業者支援の参加・活用状況を共有し、看護職者に対する支援のあり方を意見交換する「人材育成に関する意見交換会」を開催し、卒業者の主体的なキャリアマネジメント意識を喚起するとともに現場の卒業者や看護管理者と協働した支援を行ってきた。

1) 卒業者支援事業の目的と開催方法

本事業は、本学卒業者の新任期（就業後1～3年）の職場定着と生涯学習支援を目指して、同期生が母校に集い、就業を通じて感じている様々な体験や悩みを仲間や先輩教員と自由に語り合うことを通して明日への活力を高めることを目的としている。就業後間もない時期で新たな学びと共に職場に適応しきれず悩みや不安を抱えやすい6月頃に「新卒者交流会」を開催し、また卒後2年目には、1年後の自分を振り返り、自身や仲間の成長と学びを自覚できるように「卒後2年目卒業者交流会」を開催してきた。新卒者、卒後2年目卒業者全員に参加案内を送付し、郵送返信、電子メール申し込みとした。また、本学所在地の岐阜県、隣県である愛知県の卒業者就業医療施設看護管理者へ開催の趣旨説明と参加勧奨を文書にて依頼している。「卒業者交流会・研修会」は、学部同窓会と共催し、毎年度11月初旬の土曜日に開催してきた。平成30年度は、平成29年

度までの全卒業生 1,211 名のうち連絡可能な 1,134 名に開催案内を郵送し参加を募っている。

卒業生交流会当日は、本学の生涯学習支援についてのオリエンテーションのあと、卒業生数名と教員 2 名で編成する各グループに分かれ、意見交換を行っている。教員は卒業生が話しやすい雰囲気を作り意見を引き出すようにグループにかかわり、その場で必要に応じたアドバイスを行い、また、意見交換内容の要約を記録している。交流会終了時には、参加者全員に在学学生へのメッセージカードの記入を依頼するとともに、簡単なアンケートを行い、時期や方法の適切性、参加してよかったこと、要望などを把握してその後の交流会のあり方を検討する参考としている。

交流会開催と報告小冊子作成にあたり、倫理的配慮として次の 3 点に留意した。①事業への参加案内時は、看護研究センターが保管管理する卒業生データベースの使用について承認を求めたうえで参加案内を送付し、個人の自由意思による参加を保障した。②事業実施当日の倫理的配慮としては、交流会時の意見交換内容、及びアンケート用紙への記載内容は、個人や組織が特定されないよう取りまとめ、卒業生への支援報告書に掲載し公開することを当日のプログラムに記載し、口頭でも説明して参加者の理解を得た。③事業参加者へ意見・感想を求めるアンケート用紙の記入・提出については、自由意思により回収ボックスへ投函することとし、投函されたアンケートのみを集計した。

2) 卒業生支援事業の実施結果

(1) 卒業生交流会

卒業生交流会への参加人数は、「新卒生交流会」では平成 19 年度から平成 30 年度までの 12 年間で 463 名、1 回の参加人数は 25～56 名で平均 39 名であった。この間の対象となる卒業生 959 名のうち 48%が参加したことになる。「卒後 2 年目卒業生交流会」は平成 23 年度から平成 30 年度までの 8 年間で 140 名、1 回の参加人数は 11～28 名で平均 18 名であった。平成 21 年度からの対象卒業生 636 名のうち 22%が参加した。「看護実践を語る会」の参加人数は平成 26 年度が 18 名、「卒業生交流会」の参加人数は平成 27 年度から平成 30 年までの 4 年間で 85 名、1 回の参加人数は 16～26 名で平均 21 名であった。

交流会終了時に『在学学生へのメッセージカード』への記入を依頼しており、これまでは参加者全員がメッセージを記入し、学生時代の学習が役立つこと、友達をつくること、

思いっきり楽しむことなどの声が寄せられている。メッセージカードは小冊子に掲載するとともにオープンキャンパス時に公開したのち、学内に掲示している。

(2) 人材育成に関する意見交換会

「人材育成に関する意見交換会」は毎年度、大学側から卒業生の生涯学習支援事業への参加状況等報告後に『卒業生が取り組む看護実践上の課題と求める支援について』をテーマに意見交換を行った。平成 23 年度から 25 年度までは 4 施設（岐阜地域 2、飛騨・東濃地域 2）において、1 施設 3 名から 14 名の卒業生の参加を得て行った。26 年度から 28 年度は 2 施設ずつ隔年開催とすることにしたが、より現状に即した意見交換となるよう、特に、27 年度からは対象をしばらく『4 年目以上の卒業生の看護実践の状況と必要な支援について』をテーマに 4 名から 13 名の参加で行った。さらに、29 年度は新たに岐阜地域の 1 施設を加え 3 施設で『新任期の卒業生の現状と支援ニーズ等について』をテーマに 4 名から 6 名の参加で行った。そして、30 年度は施設側からの意見交換テーマの要望を受け、2 施設で『現状の看護実践と研究活動を振り返り、今後のキャリアマネジメントをどのように考えるか等について』をテーマに修了生・卒業生 6 名から 8 名の参加を得て意見交換した。

各施設とも看護部管理者・教育担当者が 1 名から 4 名、大学教員が 4 名から 6 名参加し、毎年度 2 月頃に 1 時間程度の意見交換を実施している。看護部管理者同席のもと卒業生の実践状況を共有し、大学と現場が協働して支援していくことの必要性を確認し合っている。特に平成 27・28 年度は、看護研究センター教員が科学研究費補助金（平成 23-26 年度）による「学士課程卒業生の看護実践能力獲得過程と生涯学習支援プログラムの開発」（岩村ら, 2015）の研究成果として“卒業生の看護実践の現状と支援ニーズ及び必要な支援”について卒業年度ごとにまとめた成果（註①）を資料提供し、事前に卒業生と管理者に提示したうえで意見交換した。

III. 直近 5 年間（平成 30-26 年度）の卒業生交流事業の成果

今回、これらの卒業生交流会開催結果を振り返り、小冊子に掲載した参加者の意見交換での語りの内容、参加者アンケート結果から平成 30 年度から 26 年度までの直近 5

年間の卒業生支援事業の成果を確認した。交流会参加状況は表2に示す通りである。

新卒者交流会・卒後2年目卒業生交流会の参加者は、新卒者約49%、卒後2年目卒業生約21%であったが卒業生交流会は例年20名前後であった。参加者の職種別参加割合は、看護師80%と最も多く、助産師10%、保健師5%、養護教諭5%であった。交流会参加にあたり、自ら事前に勤務希望をだし参加する者もいるが、開催案内時、参加支援依頼をした施設を中心に出張扱い等看護管理者から参加を勧められた者も例年4割近くおり、職場の協力・支援を受けて参加していることが伺い知れた。

開催後の小冊子掲載内容を基に、グループ意見交換の内容と終了後のアンケート結果を集約した。語り合った内容の要点を分類したところ、表3に示す通り、新卒者では、【看護実践上の困難とその対処】で、時間管理や知識・技術、患者との関わりに困難を感じている状況が語られた。【新人教育・指導の状況】では、施設ごとの教育体制について共有し、所属部署での先輩からの指導の様子や自己学習の状況が、【就業状況】では、就業継続への思いや職場での人間関係についてなどが語られた。【就職して良かったこと】として、対象との関わりを持つことや対象からの承認を得られたこと、少しずつできることが増え、先輩から認めてもらうこと等を挙げていた。卒後2年目卒業生では、表4に示す通り、【看護実践の状況】として、患者・家族への対応における困難感は感じつつも、リスクの高い患者を受け持つことが増える中で、他職種との調整や患者の思いを傾聴する心の余裕など2年目としての変化や自己の成長を感じることができていた。【教育・指導の状況】では、施設により教育体制はさまざまであるが、自分自身の課題を見つけ取り組んでいる様子が語られた。

終了後のアンケート結果では、新卒者、卒後2年目卒業生とも、ほとんどの参加者が大学でこの時期に開催することは適切であると回答し、参加して有意義だった理由として、「他施設の状況を知ることができてよかった（新卒者

39件、卒後2年目17件）」「久しぶりに同期生と話せて楽しかった・安心した（新卒者62件、卒後2年目32件）」「同じ悩みを共有することができ、頑張ろうと思えた（新卒者95件、卒後2年目27件）」などであった。

卒業生交流会は卒業年度を超え語り合った。平成27年度までは看護実践を語る会として、平成28年度からはキャリアアップ支援のための研修会と抱き合わせて開催した。28年度は“キャリアマネジメントについて”をテーマに機能看護学領域教授の講話、29年度は“がん患者への就労支援のあり方について”をテーマに本学修了者のがん専門看護師と成熟期看護学領域教授2名の講話の後、グループに分かれ意見交流した。平成30年度は卒業生2名からの“ベッドサイドにおける退院支援の実際”についての話題提供の後、自身の看護実践の振り返りと自身の内省や気付きを語り合う機会とした。30年度の主な語りの内容とアンケート結果を小冊子で確認すると、忙しい中で1人の患者・家族にじっくり関わることが難しい現実の中、困難さはあるが関わりを持つために工夫していることや、患者の生活状況や看護計画について、カンファレンスや記録で共有することの困難さと同時に共有することの重要性などが語られた。終了後のアンケート結果では、この交流会が大変有意義だったとし、忘れていた看護への思いを振り返らせてくれた。卒業生の活躍を実感でき、事例を通して現状の課題や問題解決方法等を知ることができ良かった。同じ教育を受けた者同士、看護について考えることができて良かった。など有意義であった理由を記述し、また、頑張ろうとする姿勢を示していた。

IV. 考察

1. 本学が取り組む卒業生支援・キャリア形成支援事業の意義

1) 卒業生同士が主体的に自身の看護実践を振り返り交流することの意義

新卒者交流会では、新卒者にとっては、個々で悩んでい

表2 新卒者・卒後2年目卒業生及び卒業生交流会参加状況（平成30年度～26年度）

開催年度と対象	参加者数（参加率）					合計
	30年度	29年度	28年度	27年度	26年度	
新卒者	25(32%)	40(51%)	56(69%)	36(45%)	38(49%)	195(49%)
卒後2年目卒業生	14(18%)	20(25%)	11(14%)	17(22%)	20(26%)	82(21%)
卒業生	23	26	16	20	18	—

表3 新卒者交流会での交流内容

分類		語りの要点(抜粋)
看護実践上の困難とその対処	時間管理	<ul style="list-style-type: none"> ・多重課題時の優先順位の考え方が難しい ・時間内に業務を終えることができない ・勤務時間の管理が厳しい
	知識・技術	<ul style="list-style-type: none"> ・心電図モニターの波形が読めないなどの知識不足から自身の未熟さを痛感する ・急変時の対応ができない ・看護技術に不安がある
	患者との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・業務優先になりがちであり、看護をしている実感がもてない(看護を考える余裕がない) ・ターミナル期や病状が悪化していく患者への関わりに苦悩する ・身体拘束など倫理的な視点で悩む場面がある
	記録・報告	<ul style="list-style-type: none"> ・記録の書き方や書類の取り扱いに慣れず難しい ・報告時などの医師とのコミュニケーションに緊張する
新人教育・指導の状況	先輩との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・PNS体制では、ベアの先輩がいることで相談や質問がしやすい ・看護技術のチェックを受けるが、指導できる先輩に限られており、声をかけづらい ・先輩によって指導や対応に差があり困ることがある ・多忙なため先輩にも余裕がなく厳しくされることもある
	自己学習	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強会や自己学習の時間を活用し、勉強している ・帰宅後や休日に事前学習や振り返りを行うようにしている ・同期と指導内容を共有するようにしている
就業状況	就業継続への思い	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の未熟さにふがいなさを感じ辛くなることもある ・辞めたいと思うこともある ・大変なこともあるが、できるところまで頑張りたい
	休日等の過ごし方	<ul style="list-style-type: none"> ・疲れてしまい自己学習できないこともある ・翌日の仕事のことを考えてしまい落ち着かない ・趣味や家族・同期との時間でリフレッシュするようにしている
	人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩の気遣いに救われている ・職場内は仲がよく、働きやすい ・同期と励ましあい支えあっている
就職してよかったこと		<ul style="list-style-type: none"> ・患者からの「ありがとう」という言葉や名前を覚えてもらえること ・患者と関わる時間や元気になっていく姿をみる ・先輩から出来ていることを認めてもらうこと ・少しずつできることが増えていくこと

表4 卒後2年目卒業者交流会での交流内容

分類		語りの要点(抜粋)
看護実践の状況	患者・家族への対応における困難感	<ul style="list-style-type: none"> ・患者・家族と向き合う時間が十分持てずもどかしさを感じる ・頻回のナースコールにいらいらしてしまう ・急変時の対応が難しい
	2年目の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・重症患者を受け持つことが増え、責任を感じている ・受け持つ患者のリスクが高くなったため、医師との連絡・調整が増えた ・困難事例なども受け持つようになり、今までにない経験ができていく
	自己の成長	<ul style="list-style-type: none"> ・患者と向きあう時間をつくれるようになってきた ・退院後を視野に入れ看護を考えることができるようになった ・積極的に患者のそばに行き、自分にできることはないか考えるようにしている
	悩み	<ul style="list-style-type: none"> ・同期との差が出てきている・比べてしまう ・「分からない」とは言えない状況にある ・自立しきれずフォローしてもらっている
教育・指導の状況	充実した教育体制	<ul style="list-style-type: none"> ・PNS体制のなか、ベアの先輩から学ぶことができていく ・2年目の指導担当や体制が整っている ・先輩に恵まれ、支えられている
	指導体制の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩の目が離れることにより不安を感じる ・未経験の技術を指導してもらいづらい ・2年目になり指導が不十分と感じる
	自己学習	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から積極的に質問や相談をするようにしている ・事前学習や振り返りを行う ・院内外の研修に参加する
就業状況	就業継続への思い	<ul style="list-style-type: none"> ・経験してみたい分野ができた ・1年目に比べて辞めたいと思わなくなった ・今後の生涯設計に合わせて考えていきたい
	人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・看護について相談しやすくなった ・相談する相手を選んでいる ・同期と助け合いながら頑張っている
	役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会や研究チームなどに参加し始めている
就職してよかったこと		<ul style="list-style-type: none"> ・患者からの「ありがとう」という言葉 ・患者が元気になっていく姿 ・頼りにされていると感じるとき

た問題が、同期卒業生同士の情報交換によって共有することができ、自分ひとりだけが悩んでいるのではないことに気づき、今後の活力に繋がっているように思われる。時期的に不安や疲れを感じている時であったこともあり、同級生と交流することで励みになると思われ、その後の就業継続に繋がっていると考える。卒後2年目では、他職種との調整や患者の思いを傾聴する心の余裕など2年目としての変化や自己の成長を感じ、それなりに自立・自律して、できる部分も増えて自己の成長を実感すると同時に、施設の状態に応じた教育体制の中で自分自身の課題を見つけ取り組んでいる様子が伺える。このように自己の実践を振り返り語り合うことでお互いの頑張りを認め合い、気持ちをリフレッシュさせて、職場適応を支援することは効果的であると考える(岩村ら, 2017)。新任期ほど切実なニーズはないが、学部同窓会と共催する卒業生交流会は卒業年度を超えた先輩・後輩同士の交流の中、後輩は先輩の頑張りを身近に感じ、先輩は後輩のキャリア形成過程での苦悩と同時に頑張ってきた自分の実践を振り返り看護について考える機会となっていると考える。このような卒業生間の繋がりが関係性を活用した支援は自己目標達成に向けてのキャリア開発に関する支援として有効であると考える(岩村ら, 2017)。

2) 卒業生と在学生在が交流する意義

「卒業生と在在生との交流会」では、第1部のシンポジウムにおける卒業生の話から、看護職として働くことについて考えたり、今、学んでいることの意味を考えるなど、看護を学ぶ動機を高める機会となっていた。第2部の卒業生との交流会は、学生自身が自分の聞きたいことを自由に聞ける機会となり、参加者は主体的な姿勢で参加していた。また、看護職として働くことのイメージが深まったり、国家試験への対策、勉強の仕方、具体的な大学生活の過ごし方を考える機会にもなっていた。第1部・第2部を通して、学生は今後の就職進路や現在の学習について考えることができ、交流会開催の趣旨に合った反応が得られた。卒業生にとっては、シンポジウムや在在生との交流を通じて、これまでの進路選択や看護実践を振り返る機会となっており、実践への意欲につながっていた。このように、先輩のキャリアマネジメントの実際を直に確認する機会は、今、学ぶことの意味と具体的な対策を講じたうえで進路選択を考えることの重要性が実感できる有効な場であると考

える。そして、ディプロマ・ポリシーの5つ目に掲げる“看護実践とその振り返りを重ねることを通して、看護学研究的意義を理解するとともに、看護実践の充実・改善と自己を成長させる取り組みができる”という方針達成の一助になると考える。

3) 現場看護職者と協働する重要性

本学は県内の看護職者の生涯学習支援の拠点として、卒業生支援にあたって現場看護職者の生涯学習支援に繋がれることを念頭に活動している。卒業生交流会では、交流会への参加勧奨を依頼し、実施結果を小冊子で報告することで、働く看護職者の生の声を確認していただいている。そして、「県内医療施設等による就職ガイダンス」では小冊子を活用し、現場の看護管理者等に新任期の状況を理解してもらい、新任者の就業支援や看護生涯学習支援に役立てていただいている。また、「人材育成に関する意見交換会」では、学長・学部長等大学教員が現場に出向き、現場の看護管理者及び卒業生と忌憚らない意見交換を実施するなど、常に現場看護職者と協働して支援できるよう働きかけられている。このことにより、より卒業生の看護実践能力や現場の状況に即した支援ができるとともに、大学の教育や生涯学習支援の諸活動の評価を加えながら充実に向け検討することに繋がると考える(岩村ら, 2017)。

2. 今後の課題

新卒者及び卒後2年目卒業生交流会については、今後も参加者からの肯定的評価や要望を活かし継続していく。一方、卒業生への情報提供や卒業生同士が就業・生涯学習に関する情報交換ができるシステム等の構築及び大学と接点が乏しい卒業生の就業・生涯学習支援ニーズの把握方法などの検討が必要である。これらについては、学部同窓会や大学院同窓会と連携・協働した支援のあり方を各組織とともに検討していく必要がある。

今後も就職ガイダンス時等で現場の看護管理者と本取り組みの結果・課題等を共有して、看護実践現場と連携・協働して卒業生等看護職者のニーズに即した就業・看護生涯学習支援の方法を共に検討していくことが必要と考える。

註①：科学研究費補助金事業の研究において、本学卒業生は、卒後1-2年目では、看護実践の自立・自律に向けた支援や、自己と実践の振り返りへの支援、心理面への支援を

必要としていた。また、卒後3-5年目は、チームでの看護実践や部署の役割遂行を支える幅広い研修や新人指導等の役割遂行への支援を必要としており、特に4-5年日以降は、リーダーシップや人材育成について学ぶことや、大学院進学等のキャリアマネジメントに関する支援を必要としていた。さらに卒後6-9年目は、部署の課題解決のための取り組みや研究、及びワークライフバランスを取り看護実践を継続するための支援を必要としていた(岩村ら, 2017)。

文献

岩村龍子, 会田敬志, 田辺満子ほか. (2015) 平成23年度～26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「学士課程卒業者の看護実践能力獲得過程と生涯学習支援プログラムの開発」研究成果報告書. (pp. 147-163).

岩村龍子, 大川真智子, 小澤和弘ほか. (2016). 学士課程卒業者の卒後1-3年目の看護実践能力獲得状況. 岐阜県立看護大学紀要, 16(1), 51-60.

岩村龍子, 大川真智子, 田辺満子ほか. (2017). 大学と就業施設の協働による学士課程卒業生への看護生涯学習支援のあり方. 岐阜県立看護大学紀要, 17(1), 75-83.